興行としての宣教
——G・オルチンによる幻燈伝道をめぐって

山本美紀

1　はじめに

ジョージ・オルチン（George Allchin 一八五二—一九三五）による幻燈伝道は、彼の宣教師としての仕事において、賛美歌の仕事と並ぶ大きな活動である。時に一〇〇〇人以上という集客力を誇った彼の「幻燈伝道集会　Lantern Lecture」についての報告からは、現代の伝道キャラバン集会というよりも、旅回りの一座の地方公演と同種の熱気が伝わってくる。

オルチン自身、幻燈伝道集会の持つエンターテイメント性を意識していた。むしろ積極的にそれを狙っていたとさえいえるだろう。実際彼は、自分の幻燈伝道の報告において、「entertain」という言葉を用いている（Allchin 1900, p. 298）。それは、後述するように、一人でも多くの聴衆（信者）を獲得しようとする彼の信念と、そのための苦肉の策であり、幻燈伝道集会は、いわばその実践の結果であると言えよう（Allchin 1901, p. 92）。

一方、オルチンの幻燈伝道集会に集まる人々の方も、めずらしい見世物を見に行く感覚とほとんど変わりはなかったと思われる。オルチンやその他の宣教師たちの様々な報告書も、「人々が集まるのは、ほとんど世俗的な関心からである」としている[1]（MH 1897 March, 92）。集会は教会で行われもしたが、集客力のある彼の幻燈伝道集会は、大人数の収容可能な地方の劇場やクラブハウスなどを会場とすることが多かった。そこで人々は、初めて異国のおとぎ話（福音）を聴き、初めて外国人を見、初めて賛美歌を耳にしたのである。少々説教めいた話を聞いたとしても、当時の地方都市（村）としては、絶好の娯楽であったことにはちがいない。何より、時には「チケットを買って」観衆は伝道集会に集まったのである[2]（All-

chin 1900, p. 300)。彼らにとっては他の興行と変わることなど、形式としては無かったのであろう。

もちろん、オルチンも並外れたエンターテイナーであったに違いない。伝道集会と幻燈上演を結びつけるというそのアイディアじたいが、彼の発想によるものなのかどうかは今の時点では断言できないが、先にもあげたようにオルチン自身が entertain や attractive という表現を用いる一方で、それを見た他の宣教師も、彼のエンターテイナーぶりを伝えている。[3] いずれにせよ、彼が幻燈を伝道集会に用いるにあたり、日本の聴衆にとって、魅力的な伝道集会を演出することによって、何とかして一人でも多くに福音を伝えようとしたことは明らかであり、その背景には、彼独特の日本の一般大衆への洞察眼と日本文化理解があった。それは一種のマーケットリサーチであるとも言えよう。

本稿では、そのような考えを持つオルチンの幻燈伝道集会を「興行」という視点からとらえなおすことを試みる。そこから、観客の見えないニーズに対応しながらプログラムを進めていく、オルチン独特の興行師のような感性を伴う宣教観をあきらかにし、同時に彼の様々なチャレンジから透けて見える、現代のグローバリズムをめぐる問題に通じる課題を示したい。

2　オルチンの幻燈伝道と日本の状況

「この七年間というもの、北は札幌から南は鹿児島まで、私は日本中を、幻燈を持って説教してまわりました。」(Allchin 1900, p. 299) という言葉通り、彼は一八九六年秋の六週間に及ぶ九州での伝道旅行をはじめとして、日本各地に幻燈を携え出向いていった。この、九州キャラバンが幻燈伝道旅行の最初のものかどうかははっきりしないが、幻燈を用いた初期の成果であることは間違いない。

その頃のオルチンは、日本の教会内部のごたごたに非常な困難さを覚えていたという。[4] 九州においてもその状況は変わりなく、「教会の病は未だ嘆かわしく、多くのクリスチャンの集まりが彼らのために説教をする牧師をおいていない」(Allchin 1897, p. 245) とあることから、日本における教会組織の中央の分裂が地方まで伝わっていたことがわかる。しかし、このすぐ後に続いて、「しかし、そのような病もすでに行き着くところまでいっているし、彼らの前にはよりよき未来があるに違いないと私は信じている」と希望に満ちた言葉があり、これは九州幻燈伝道集会の手ごたえが彼に言わせたものであると考えられる。というのも、この文章はミッショナリー・ヘラルド誌に寄せられた九州幻燈伝道旅行についての報告書の終わり近くに書かれたもので、記事のほとんどが、九州においてどれほど多くの人々が彼の幻燈伝道集会に集まったか、どのような反応が

得られたかに費やされているからである（Ibid, pp. 244-246）。

オルチンが九州で回ったのは、福岡、大牟田、熊本、八代、水俣、鹿児島、延岡であり、その他にもこれらの大きな街に隣接する小さな村にも、乞われれば出かけていった。その評判は大変なものであり、皮切りの幻燈伝道集会では、長老派の教会に二五〇人がスシ詰め状態で集まり、続いての会場は劇場で、一〇〇〇人が集まったという。また、他にも大牟田では、劇場に一二〇〇人があつまり、その参集状況も開演三時間前の午後四時には、良い席を狙う観客が集まり始め、開演の午後七時には一二〇〇人もの観客が集まっていた。[5]

このような数字は、九州伝道旅行期間中だけではなく、その後も幻燈伝道集会を行なえばそのような盛況な状態が続いたようである。実際彼は、先にもとりあげた文章の中で、「ある伝道旅行では、私は一人で一三の町をめぐり、総人口一三万八〇〇〇人のうちの、二万二三六〇人に福音を届けた」（Allchin 1900, p. 297）としており、幻燈伝道集会の様式で、多くの人々が福音にふれ、賛美歌にふれた。

幻燈伝道集会のプログラムがどのようなものであったか、今のところ資料が見つかっていないので不明だが、彼の記述によると、だいたい一時間半から二時間程度で幻燈・説教・賛美歌で構成されていたようである。具体的な集会の運びについて、彼自身が書いている様々な文章の断片をつなげてみると、観客はまず入り口で「これらのお話が書いてある素敵なトラクトを、いずれも一セント[6]で買い」、会場に入る。そして集会が始まると、まず、幻燈が映され、それにちなんだ説教があり、その説教中に「ちょうどよいところで一・二曲の賛美歌を紹介」した。一方観客は、先ほど購入したトラクトを「絵（スライド）と説教を深く理解する助けとした」という（Allchin 1900, p. 298）。

もっとも中には遅れて入ってくる者がいて（それは、上流階級のものに多いのだが）、彼はそのような者に対し、「最も愚かなのは、単に映写会としてこの機会を浪費することである」と容赦が無い。遅れてきて「もう一度幻燈を上演してほしい」と願ったが、彼はそれはもちろん「丁寧にお断りした」（Ibid, p. 300）。

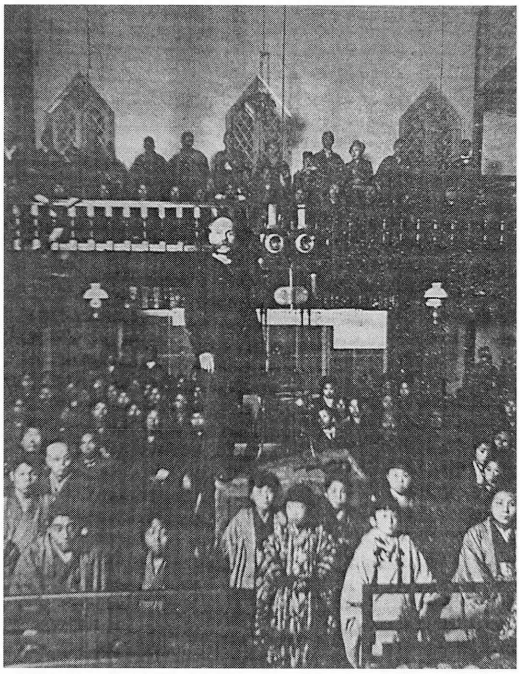

写真1　オルチンと観衆：Allchin, George, "For Young People : Preaching With a Lantern in Japan". *The Missionary Herald of the A. B. C. F. M.* 1900 July, p. 299 より転載

なぜなら、「私が行くのは、何よりもキリストの真実に彼らの良心を開かせるためです。ですから、彼らの耳に福音が鳴り響いた状態で彼らを去らせなくてはなりません。すべてのことが、まじめな感情を定着させるために企画されているのです。彼らの多くは、説教のためではなく、絵（幻燈）のために集まっています。しかし、後には彼らの心に「小さな細い声」が響いていなくてはなりません」（Ibid.）とオルチン自身が言うように、彼にとって幻燈伝道は、あくまでも説教の延長線上にあったものである。そのため、伝道集会の最後を幻燈が締めくくることは無く、彼はどんなに魅力的な上演を行なっていたとしても、あくまでも最後に説教で締めくくるようにしていたと考えられる。このあたりに観客との認識のズレがあり、内心忸怩たる思いがあったようだ。

幻燈が流行したのは、明治一〇年代半ばごろから三〇年代半ばまでと言われ、そのピークは二〇年代、ちょうど日清戦争（一八九四―一八九五）の時代であるという（岩本二〇〇二、一六五・一七六頁）。

明治七年に再渡来した幻燈は、マジックランタンと呼ばれ、すでに一〇〇年の歴史を持つ写し絵の土壌を背景に、一般に広まっていったと考えられる。初期の頃は、「写し絵」が芸能・見世物・仏話・趣味・道楽を扱っていたのに対し、「幻燈」は化学・歴史・地理・教育・道徳を扱うものであり、西洋幻燈と写し絵はジャンル上でゆるやかな住み分けができていた。当時の日本において「幻燈」は庶民の娯楽としての興行の面と、教育の面の両方で受け入れられていたものである。[7]

特に、幻燈の流行のピークであった明治二〇年代には、「教育幻燈」[8]を初めとした教育分野での活動と並んで、奇術師たちによって以前からの「写し絵」[9]の文化を引き継いだ興行としての幻燈上映が行われるようになっていた（岩本二〇〇二、一七六頁）。

オルチンの報告書に「初期の私の伝道旅行は大人の観衆を集めるのが大変でした。というのも、普通学校においては幻燈というのはほとんどが〝おもちゃ〟であり、子供に夜の「おたのしみ」として与えるものだからです。人々ははじめ、私のやる幻燈がそれとはまた違うものであるということがわかりませんでした。しかしある夜、彼らはその間違いに気付きました。それからはいつも、多くの男女が参集するようになったのです」（Allchin 1900, p. 297）とあるのは、そのような背景があったからであろう。

さて、実際の幻燈伝道集会の効果であるが、いくつかの美談が残っている。オルチンが幻燈伝道旅行に持っていったレパートリーの全容は定かではないが、後に詳述するオルチン・オリジナルの「ほととぎす（放蕩息子の物語）」[10]や、既成であってもオルチンの演る「天路歴程」[11]は特に観衆の感動を誘うものであったようだ。

ある宣教師は、京都西陣で行われた「ほととぎす」を見た一人の

若者の回心を、劇的なタッチで報告している。当然、その若者は「ただ放蕩に身をゆだねた人生」を歩む日本版の放蕩息子である。彼は、「肉体的・道徳的には、どうしようもない者であったが、ただ好奇心から伝道集会に来た」ところが、その内容に感動し、回心したという（Learned 1900, pp. 57-58）。また、オルチン自身の報告では、刑務所で「天路歴程」を見たある婦人の話がある。その婦人は看守の妻であったが、近所の心無い噂の種にされている女性であった。しかし、「天路歴程」を見てすぐに、「自分はキリストにつながりたい」と夫に懇願し、今では彼等の家が家庭集会の会場となった、というものである（Allchin 1901b, p. 100）。

このような話は他にもいくつかあるので、おそらく日本人にとって、その内容は無関係な異国の物語というよりも、日常的な自分の生活や自分自身を振り返る契機となるような、身近なものであったに違いない。実際、何かの興行を見に来るようにやってきた観客は、珍しい外国人が、珍しい異国の話を、珍しい幻燈をもってやって来る、ということにまずは、興味津々であったはずである。そして、それが人々の日常の様々な想いをなぞるような内容で、オルチン自身も幻燈伝道の中にこれから見るような、伝道成功のための工夫をあれこれ凝らし、「彼（オルチン）は幻燈によって、いつでも観衆を得ることができるのです」（Turrey 1898, p. 8）という評価を得るものとなっていたのであろう。

3　台本としてのトラクト「ほととぎす」「世は情け」

彼のレパートリーには様々なものがあったようである。彼自身の言葉によると、「パウロの生涯」「ヨセフの生涯」「天路歴程」といった市販のものと、聖書のたとえ話を題材としたオルチンのオリジナル作品「ほととぎす」「世は情け」が確認される。中でも最後にあげた二つはオルチン自身が「そのたとえ話には国籍を超えた学びがあり、地球上の全ての人間性が教えられていて、私の最良のトピックであり、それから（「ほととぎす」と「世は情け」は）生まれたものである」と自負するほどのものであり、彼の幻燈伝道には欠かすことの出来ない重要なレパートリーとなっていた（Allchin 1900, p. 298）。特にこの「ほととぎす」「世は情け」というタイトルには、オルチンの日本におけるミッションへの思い入れがこめられていたのだった。ここでは、幻燈の台本ともなった二つのトラクトに焦点を当てる。

この二つの作品の底本になっている聖書のたとえ話はそれぞれ、「ほととぎす」が「放蕩息子」であり、「世は情け」が「善きサマリア人」[12]である。「世は情け」が「善きサマリア人」であるのは、おぼろげながら想像できるにしても、まず、不思議に思われるのが、「ほととぎす」がなぜ「放蕩息子」なのかであろう。その命名について、オルチンは「名前に何がこめられているか」と題し、彼の宣

教そのものへの大胆な考え方と共に、ミッション・ニュースで詳しく述べている（Allchin 1901a）。

まず、彼は「ほうとうむすこ」という響きと「ほととぎす」という響きがたまたま似ていること、そして、「ほととぎす」という鳥が、日本において古くから文学に登場していたことをあげている。英語圏の読者にとってカッコウ（ほととぎす）は喜びと、明るい希望を想起させるが、日本では「五月から七月の間、カッコウは悲しく夜通し鳴きつづけます。そして、ほんのちょっと留守にしただけなのに、その巣に戻ることに強く憧れるのです」（Ibid., p. 93）これが、「ほととぎす」という名前を「放蕩息子」にあてた直接の理由となった。また、日本の知識人にとっては、「ほととぎす」というのは、詩情を掻き立てるものだったようで、その漢字表記である「不如帰（かえるにしかず）」が、放蕩の限りを尽くし、帰るに帰れない放蕩息子の心情と重なるものであったことが理由にあげられている。さらに、徳冨蘆花の小説『不如帰（ほととぎす）』の影響についてもふれており、その小説に色調がただよい、あわれを誘うものがあるのは、タイトルにこの名前がついているからだとし、「日本人の読者は、カッコウが鳴くのはわが身の悲しみを歌っているのだといって、いつも悲しく哀れな気持ちになるのである」（Ibid.,）と、自身のトラクトのタイトル決定へと導く要因となった日本人の文化的・情緒的背景が報告されている。

一方の「世は情け」であるが、これは有名な歌「旅は道連れ、世

写真 2　トラクト表紙：Allchin, George, "What's in a Name" *The Japan Mission News of the A.B.C.F.M.* Vol. IV, No. 6 (1901 March), p. 93 より転載

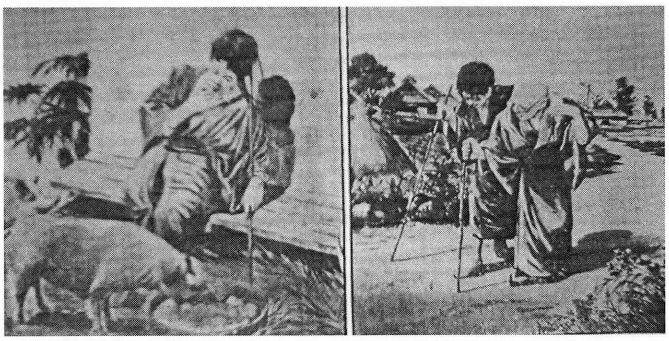

写真 3　トラクト「ほととぎす」"日本版放蕩息子"挿絵：Allchin, George, "For Young People : Preaching With a Lantern in Japan". *The Missionary Herald of the A. B. C. F. M.* 1900 July, p. 297 より転載

は情け」から取られている。「旅に欲しいのは道連れである。一方、世の中を渡っていくには、同情心が必要だ」と彼は記しており、後半部分に「善きサマリア人」との共通項を見出した。その理由として、「キリストこそが、偉大な同情者であり、救い主」であり、「善きサマリア人」のたとえ話に出てくるような、他者を哀れみ、助けようとする精神は、キリスト教の特性であるとする（Ibid., pp. 94）。

そして、この二つはセットで、「ほととぎす」は「父なる神の愛」を「世は情け」は「人類の兄弟愛」という、キリスト教の中で重要な要素である「愛」を具体的な側面から示すものとなっていた。

そしてオルチンは他にもこの二つのトラクトで、様々な工夫や実験を試みていた。まずその翻訳についてであるが、「ほととぎす」は簡単な文語体で翻訳し、「世は情け」では口語体での翻訳を行っている。この理由として、前者は「学校の生徒が楽しめて理解でき、同時に教育を受けた階級の人々にも理解できるように」するためであった。また後者については、オルチン自身「口語文の実験」と語るように、「日本の教育熱は盛んで、大多数が簡単な読み書きができる。しかしそれでも、特に田舎では、未だに口語によるだけの男女が大勢いる」という事情からであったという（Ibid., p. 94）。

さらに、「（日本人に）特に教訓になるのは、これら二作品の図柄が日本の生活を描いたものであり、彼らの生活状況を踏まえてかかれている」（Ibid., pp. 298）というように、図柄もストーリーそのものも、聖書の中のたとえ話をそのまま移すのではなく、日本の日常生活の中に置き換えて描く工夫がほどこされていた。特に「ほととぎす」の場合では、「放蕩」と呼ばれる行為が日本の生活文化における「放蕩」に置き換えられていたという（Ibid., p. 94）。

とはいえ、これら二つのオリジナル作品が、幻燈、トラクトともにどのようなものであるか、現在までの筆者の調査では実物が見つかっておらず、また、それを見た日本人による報告も未確認である。[13] 手がかりは、本稿で載せている写真3のみで、日本の風物を取り入れた図柄であったことを想像するしかない。したがって、実際にどれほどの共感を持って受け入れられたのか、客観的な意見としては、今のところは他の外国人宣教師による報告に頼るしかないのである。この点については、幻燈伝道の行われた頻度や規模、また幻燈伝道そのものの形式が他の宣教師によっても、また、他の宣教地においてもなされていたのかなど、さらなる調査が必要であろう。

4　宣教とエンターテイメント

オルチンのこのようなトラクトなどへ日本の風俗や、文化的背景を積極的に取り入れていこうという宣教活動は、現場で活動する実際的な必要から生まれてきたものである。オルチンは従来のトラクトの読者への意識の低さ、配慮の無さを、痛烈に批判する。[14]「放蕩息子」や「善きサマリア人」という旧来のタイトルを「ほととぎ

写真 4　神戸女学院で保管されていたスライド箱：神戸女学院蔵

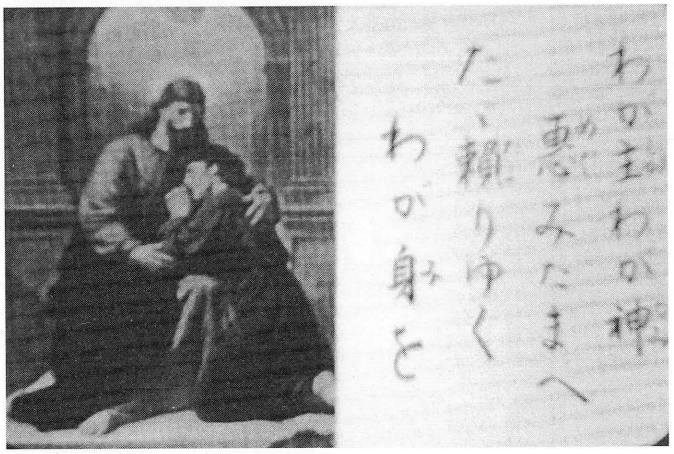

写真 5　箱の中の賛美歌スライド例：神戸女学院蔵

す」や「世は情け」に置き換えたのも、そのような考え方の延長線上に位置づけられる。[15] そしてさらに、オルチンは伝道の戦略として、日本人が「ほととぎす」や「世は情け」と聞いて連想する、様々な心象風景を想定し、そのような前提とも先入観とも言える感覚を利用できることを狙って、それぞれのタイトルをつけ、トラクトを制作し、幻燈伝道を実行していったのである。同様に、絵の題材を日本の風俗に求め、放蕩の内容を日本の放蕩に置き換えたうえに、翻訳の記述方法を文語と口語で使い分けたところなどから、彼がどのような人々に向かって宣教するのか、具体的に想定し、明確にターゲットを絞り込んでいたことがうかがわれる。

もちろん先述したように、当時の最新メディアであった西洋幻燈が、「写し絵」をはじめとしたそれまでの日本の芸能とあいまって、一般の観衆にとって比較的なじみやすかったということや、西洋幻燈と呼ばれるものが、ヨーロッパでカヴァーしていたジャンル[16]も、オルチンに幻燈を宣教のアイテムとして選ばせた背景にあるとも考えられる。

いずれにせよ、彼の幻燈伝道の成功は、アメリカ本土へも伝わり、ミッショナリー・ヘラルド誌一九九〇年七月号の記事「日本における幻燈伝道」は、一八九九年一一月二七日付けのバートン博士（Dr. Berton）からの手紙による伝道報告の依頼で書かれたものであったと考えられる。博士はそこで、「あなたは独自の仕事をなさっているようですね。でも実際の影響力がどんなものか、その評価を知りたいのです。信仰的に興味深いあなたの仕事について、どのようなものか知らせて欲しい」と書き、幻燈伝道の詳細について報告を促している（Berton

1899)。実際、オルチンの幻燈伝道を真似て行った他の宣教師もおり、本国でもオルチンのやり方が模倣されたということも言われている。他の宣教地域でも幻燈伝道は行われたということも聞くが、いずれも詳細は未確認であり、したがって国ごとに幻燈伝道に使用されるレパートリーが同じであったのかどうか、現時点では不明である。

しかしながら、少なくとも日本においては、幻燈伝道集会はオルチンの考えに基づいて演出され、「人を楽しませる」という点においては、興行と共通していたといえるだろう。そしてそれが人々に広く受け入れられたのには、今まで見てきたように彼自身の意識的・無意識的に働く、ある種の興行的センスが具体的な宣教活動に発揮されていたことを示している。

さて、オルチンの幻燈伝道についての調査の初めとして神戸女学院資料室を訪れ、オルチンの幻燈伝道に関する文献を調べるうち、小さな黒い箱にぎっしりと詰まった幻燈のガラス製のスライドに出会った。かつて女学院の中高部事務長を務めた大仁光太郎（一九一一―一九九八）氏が昭和二八年に亡くなった際、その遺族が女学院に寄贈し、そのまま院長室に保管されてきたものらしい。資料室に移されてきたのは、筆者が訪れた二〇〇三年の夏休み前のことだという。

これらのスライドが長年しまいこまれていたのだろうと思われるのは、割れたり、黴が生えてしまっているものがある一方で、無事なスライドの場合はほとんど褪色していないからである。戦災・震災と、いくどかの危機を乗り越え、目の前に現れたガラス板には日本や外国の名所や風物、記念撮影の集合写真やスナップ写真のようなもののほかに、いかにもアメリカ史などの授業で使われたと思われる偉人や歴史的建造物などが描かれている。程よく色づけされたそれらの写真絵は、かえって瑞々しい。

そして、そのような写真絵スライドに混じって、いっそうの鮮やかさで迫ってくるのが、賛美歌の歌詞の挿絵スライドである。右側に歌詞が、左側にはよく「聖書物語」などの絵本で見かけるような重厚な絵が描いてある。美しいえんじ色と深いブルーのコントラスト、夜の風景を描いたであろう青みの強い紫色は、今映写しても新鮮にちがいない。これらの挿絵と歌詞が一緒になったスライドは、英語の歌詞をつけた楽譜と対になっている。その楽譜を映しながら、傍らで歌詞を連想させる挿絵を映し、日本語歌詞を追わせたのであろうか。いずれにせよ、幻燈伝道や幻燈を使った集会の詳細については、依然として不明なところが多い。

しかしながら、幻燈をめぐって存在したと考えられる様々な音楽の場というのは、日本における初期の西洋音楽体験の場としては、非常に重要であったと考えられる。特に、オルチンによる幻燈伝道旅行は、地方にも足を延ばしており、多くの人々にとって初めて福

音を聴く機会であり、賛美歌や聖歌といった西洋音楽を生で聴き、歌う機会となっていた。そのような人々に、オルチンは一方的に教理を押し付けていくのではなく、対象へ深く入り込み、逆に多くを受け取りながら独自の宣教手段を作り上げていった。

日本における幻燈伝道については、今後明らかになるにつれて、日本の西洋音楽受容のみならず、興行文化についての新たな側面が明らかになっていくだろう。

参照文献表

執筆者不明（anon.）の文章の場合、本文中では、雑誌の別（MH：The Missionary Herald of the A. B. C. F. M. もしくは MN：The Japan Mission News of the A.B .C. F. M.）と発行月を明記し、必要に応じて頁数を表記している。

Allchin, George, 1897. "Preaching With a Lantern". *The Missionary Herald of the A. B. C. F. M.* 1897 June, pp. 244-246

Allchin, George, 1900. "For Young People : Preaching With a Lantern in Japan". *The Missionary Herald of the A. B. C. F. M.* 1900 July, pp. 297-300

Allchin, George, 1901a. "What's in a Name" *The Japan Mission News of the A. B. C. F. M.* Vol. IV, No. 6 (1901 March), pp. 92-94

Allchin, George, 1901b. "Bunyan still Preaches" *The Japan Mission News of the A. B. C. F. M.* Vol. IV, No. 6 (1901 March), p. 100

Dr. Berton., 1899. Letter to George Allchin, 27 November, 1899 若山晴子による研究ノートより

Leaned, H. Florence, 1900. "A Prodigal Son" *The Japan Mission News of the A. B. C. F. M.* (1900 July/August), pp. 57-58

岩本憲児、2002.『幻燈の世紀――映画前夜の視覚文化史――』森話社

Torrey, Elizabeth, 1898. "Kobe College". *The Japan Mission News of the A. B. C. F. M.* Vol. I, No. 3 (1898 May), pp. 7-8

若山晴子 1999.「ジョージ オルチン師と讃美歌――米国伝道宣教師文書を中心に――」『「新撰讃美歌」研究』（神戸女学院大学『新撰讃美歌』研究会編）新教出版社

若山晴子「ジョージ・オルチンに関する研究ノート」私家蔵

The Missionary Herald of the A. B. C. F. M.

anon. 1897 March, p. 92 "Editorial Paragraphs : Matters in Japan".

上記文献情報のみならず、神戸女学院資料室の若山晴子先生には、オルチン師にかかわる様々な資料情報を提供していただき、また今日までの貴重な研究成果をお示しいただきました。この場をお借りして、神戸女学院、および若山先生にお礼を申し上げます。

注

（1） オルチンからの報告をもとにした、ミッショナリー・ヘラルド誌の編集者による「日本における問題」と題した小さな文章より。「〔オルチンがいうには〕人々が、数々の絵に彩られた講演会〔幻

燈伝道集会〕には誘い合ってくるものの、日曜日にやってくるのは、ほんのわずかである。人々が考えていることは、ほとんど世俗的な関心からであり、クリスチャンの信仰を表明している者は、新しいもの、そしておそらくは、より良くまたより神聖な生活へと向かおうとする衝動を必要としているのだ。」(MH. 1987 March, 92)

(2) オルチン自身による、七年間にわたる地方への幻燈伝道旅行の報告による。

「唯一、私の良心に最も反するのが、〔伝道礼拝であるにもかかわらず〕チケットを販売するということである。この方法以外に、人々が会する劇場の莫大な利用料金を支払う手段がない。その夜出会った八〇〇人の未信者の人々のうちの一人は、福音を聴くために料金を支払ったというのが、私には不思議な感じがした。通常のやり方では、人々の間に充分な無料の整理券を配るようにしている。」(Allchin 1900, p. 300)

(3) 神戸女学院音楽科の主任であったタレー女史(Elizabeth Torrey, 1848-1922)の報告による。

「三月一日には、オルチン師が幻燈をたずさえておいでくださり、『善きサマリア人』を目と耳を通して講演してくださいました。その礼拝やスライドやお話がどのようなものであったかを口で言うのは難しいものです。彼の『ナント　ムジヒナ　カンヌシデハアリマセンカ!』〔何と無慈悲な神主ではありませんか〕という言葉には、ちょっとしたスリルがあり、みんなはその日に何度も言い合うほどでした。」(Torrey 1898, p. 8)

(4)「この時期〔一八九六年ごろ〕の宣教師たちの最大の痛恨事は、またしても『決裂』であった。しかもこのたびは教派を同じくする者同士の間のそれで、同志社からの宣教師たちの総辞職という結果を生む。—中略—当時日本の世論には、一八八九年に条約改正交渉が破綻して以来、とみに排外的国粋主義の感情が昂まっていたが、この傾向は教会の中にも及び、日本独自のいわゆる『新神学』の興隆を招いていた。」(若山一九九九、一三〇頁)

(5) このようにしてオルチンは、「この九州旅行では一三〇〇マイルを移動し、三一回の集会を持ち、延べ一五〇〇〇人以上に上る聴衆に福音を述べ伝えた。このうちの優に一三〇〇〇人は初めて福音にふれた者たちであり、このような出来事は聞いたことはないだろうけれども、幻燈が彼らを魅了したのである。」(Allchin 1897, p. 246)

(6) 二銭。写真2参照。

(7) 教育面での幻燈の使われ方としては、学校教育において明治一三年ごろ文部省の推奨によって「教育幻燈」として師範学校に配布されたり、同時期には夜学において掛図やテキストの代わりに用いられたりしていた(岩本二〇〇二、一二七—一三九頁)。そして、日清・日露の両戦争(一八九四年から一九〇五年)を経て、「幻燈は絵そのものが伝達や鑑賞の対象になるよりも、集団で見る行為、集団で聞く行為の共同体験が新聞・雑誌とは異なる場」をもたらし、「識字率の低い集団や、読書習慣のない人々へのプロパガンダとして、あるいは地域の連帯感を高める公的メディアとして、幻燈は娯楽と教育とを兼ね備え」るようになっていったとい

う（岩本二〇〇二、六六頁）。

（8）注7参照。

（9）「江戸写し絵」は都屋都楽（みやこやとらく）という写し絵の興行師によって、享和三年（一八〇三）に始められたとされている。絵が動き、子供たちに人気があった（岩本二〇〇二、八九頁）。以前から、日本には影絵芝居や覗機関（のぞきからくり）など、様々な「影を使った」芸能があり（岩本二〇〇二）、その中で育っていた技術や観客が洗練されて、「江戸写し絵」を劇場芸能として支えていたと考えられる。

（10）新約聖書ルカによる福音書一五章一一節から三二節による。

（11）ジョン・バニヤン（John Bunyan 1628-1688）の小説。The Pilgrim's Progress

（12）新約聖書ルカによる福音書一〇章二五節から三七節による。強盗におそわれ、行き倒れになったユダヤ人の男を、サマリア人の商人が助ける話。その時代、ユダヤ人はサマリア人と交際することを避けていた。

（13）その後の調査で、『不如帰』に関しては、当時のトラクトが神戸女学院図書館に保管されていることを確認した。

（14）「魅力のない表紙と、わずらわしいタイトルのために、多くのトラクトが本屋に売れ残っている。トラクト作家は、一人の観衆を獲得することができるか、まして礼拝ができるか、などといった宣教への想いや苦心もなく、想像もできないのだ。―中略―ビールやタバコや歯磨き粉といった工業製品の魅力的なポスターやけばけばしい看板は、一人でも多くの人の目を引き、購買意欲をそそろうと国中にあふれているというのに。―中略―今やキリスト教の出版界は目を覚まし、宣伝広告にもっと経費を使うべきである。」（Allchin 1901a, p. 92）

（15）「〔デフォレスト博士による〕『放蕩息子』や『善きサマリア人』の二つのトラクトが出版されたのは、それほど昔のことではないが、前者は『ホウトウムスコ』という比較的合ったタイトル翻訳がなされている。〔しかし、〕『善きサマリア人』の方は、一般の日本人にとっては、何の意味も成さずにそのまま用いられている」（Ibid.）

（16）「〔一九世紀末の〕禁酒運動や宗教団体による幻燈上映は講演と一緒になっており、強いメッセージ性を持っていた」（岩本二〇〇二、六二頁）「〔一九一〇年代前半のイギリスのスライド販売のカタログによると〕題材としては、『旧約聖書』『新約聖書』『寓意的な聖書物語』『聖人物語』『英国教会史』『教会暦』『ユーモア』『絵入り式辞集』『実物モデル集』（禁酒ほか）、『無声の法話』『旅行と説明』『賛美歌集』等、いくらでもリストは続いていく」（岩本 二〇〇二、六三頁）